

関西英語教育学会 2017 年度 (第 22 回) 研究大会

発表要旨一覧

【公募ワークショップ 第 1 室 304 教室】

めっちゃ楽しい！「即興的やりとり」のためのアクティビティ紹介

三野宮 春子 (大阪桐蔭女子大学)

伊藤 仁美 (愛徳学園中学・高等学校)

発表者たちが主催する勉強会「英語アクティビティ工房」は、思わず考えたくなるような、そして他者のアイデアも聞きたくなるような、遊び心と多様な解釈を誘発する教材・アクティビティの開発に取り組んでいる。

本ワークショップの前半では、当工房の自作アクティビティをいくつか参加者に紹介し、それをもとに「即興性」や「対話、意味交渉」について意見交換を行う。また後半では、少人数のグループごとにアクティビティのアレンジ(用途開発)を体験する時間を設ける予定である。

アクティビティの開発・試用・結果分析のサイクルを循環する過程では、理論・実践についての理解が深まることが多い。このサイクルを制限時間内に収まる程度に縮小し、参加者とともに一巡してみたい。

【公募ワークショップ 第 2 室 305 室】

主体的？対話的？深い学び？こんな実践はいかがでしょう。ーミハイル・バフチンー

西本 有逸 (京都教育大学)

次期学習指導要領のキー・コンセプトである「主体的・対話的で深い学び」について、バフチン理論から捉え直した授業実践を具体的に提案します。ワークショップのポイントは以下の通りです。

- 1) 主体的とは生徒一人一人に役割・責任を持たせるところから始まります。協同学習のデザインを考えます。
 - 2) 対話的とはことばの教育を対話的にみるということです。「ことばのやり取りを伴う人と人の接触・交流を、そして人間の意識や心理のあり様を対話的に見るという主義あるいは流儀である」バフチンの対話原理が圧巻です(西口 2013)。他者との対話、教材との対話、自己との対話を深めるなかで、生徒の認識論(epistemology)のみならず、存在論(ontology)がますます豊かになります。
 - 3) 深い学びの始源は授業の方法や形態にあるのではなく、教育内容にあります。
- これらのポイントが収斂するところは、いったい何でしょうか。中学校あるい

は高校の検定教科書、投げ込み教材を用いたワークショップで考えてみたいと思います。

【第1室 303 教室】

1. 事例報告：神戸大学附属中等教育学校英語評価尺度（KUSF）の開発プロセスの紹介—能力記述文の継続的な検証と修正を踏まえて—

増見 敦（神戸大学附属中等教育学校）

神戸大学附属中等教育学校英語科では、生徒に求められる英語運用能力に対する明確な到達目標を定めることを英語教育カリキュラム開発の1つに位置付け、平成24年度より本校独自の英語評価尺度“Kobe University Secondary School Framework (KUSF)”の開発（CEFR 準拠の英語到達基準「ジャパン・スタンダード」及びCEFR-Jを参考）を継続し、今年度で第3版の発行を迎えた。

第3版では、本校が全教科で設定している教科目標の5つの観点（「スキル・運用能力」「知識・理解」「論理的・批判的思考力」「課題探究力」「グローバルキャリア」）と、KUSFとの関係性を整理し、第2版までの「スキル・運用能力」の5技能別記述に加え、他の4観点についても、各学年に対応する記述を試みた。

今回は事例報告として、研究課題の1つである「能力記述文の検証方法の検討」に触れつつ、KUSFの開発プロセスと、その成果と課題を紹介したい。検証では、形成的評価（授業内パフォーマンス評価等）、総括的評価（定期考査等）、外部テスト（GTEC）及び質問紙調査を扱った。結果、改訂を重ねる中で能力記述文の細かな修正ができたこと、課題を教員間で共有できたといった成果に加え、質問紙でのCAN-DOに係る質問方法の課題等が明らかとなった。

2. 事例報告：小学校英語教育実施に向けての現状と課題克服に向けて—小学校現場での取り組みにおける苦闘から明るい未来へ—

高木 浩志（宝塚市立逆瀬台小学校）

いよいよ新学習指導要領が告示され、再来年からは、移行措置期間に入る。2020年度からの実施に向けて、待ったなしの状態になってきた。それでも英語が教科化されるに当たっては、「授業時間の確保」「教科書の制作」「教員の指導力」ど、根本的な課題も多い。私も小学校外国語活動部会の担当校長として、外国語活動に関していろいろな学校で研修に携わる際、「これから教科になるとすべて英語でやらないといけないのか」「授業の流し方のイメージがつかめない」との声をよく聞く。小学校教員は大学の教職課程で英語指導法が必修ではなく、自信がない教員が少なくないと思う。イメージがもてるように模擬授業を取り

入れた研修をし、5、6年の担任以外の教員も一緒になって教材・教具を作り、学校全体で取り組み、教員の疑問や不安を減らすことが大切ではないか。また、「授業時間の確保」だが、英語が教科化されると小5・小6で年間70時間（週2コマ）が必要となる。現行の「外国語活動」の倍の時間だ。現場の小学校の先生に聞いても「この時間を確保できるイメージが湧かない」という。中教審でも朝学習など15分の短時間学習3回分で1コマと計算したり、通常の45分に15分足した60分授業を設定したり、長期休暇や土曜日を活用したりなど、さまざまな時間捻出法が議論されているが、10～15分の短時間学習（モジュール学習）を充てる案の場合、学級経営や学習規律がしっかりしていないとあっという間に時間が消えてしまう。担任の授業開始の合図ですぐに活動が始められる学級作りをしておく必要がある。英語の指導以前の教員の力量も含めての学級作りが大切である。こうした課題の中で、本市での英語科の指導での小中交流の実態、そして、現状での本校の取り組みを紹介し、学校づくりの体制の中での英語科の実施に向けた上での課題克服に進むべく方向性についての議論をフロアーも含めて一緒に考えて行きたい。

3. 研究発表：協働ライティング遂行時の対話分析—母語使用とタスクタイプの影響—

新田 奈央（J国際学院 非常勤）

学習指導要領の改訂により、中高の英語授業を英語で行うとともに、ペア・ワークやグループ・ワークを通して対話的に学ぶことが求められている。本発表では、2種類の協働ライティングタスク（言語に焦点を当てたタスク、意味に焦点を当てたタスク）を遂行させた際に、協働的対話の使用言語を制限した場合（母語使用禁止）とそうでない場合（母語も必要に応じて使用可）で起こる違いについて検証した。目的の異なるタスク遂行時における使用言語を制限した場合としない場合での学習者間の対話を分析することにより、目標言語と母語がどのような機能で使用され、学習を支えているのかを分析した。この研究から、タスクの種類が対話の内容と展開に影響する場合とそうでない場合があること、母語の使用の有無が対話の流れに影響を及ぼすタスクとそうでないタスクがあることがわかった。

4. 研究発表：ライティング教育における語句整序問題に関する一考察— 同一日本語文を扱った語句整序問題と英訳問題をもとにして—

橋尾 晋平（同志社大学 大学院生）

語句整序は制限英作文の主要な指導法として定着しているが、その学習効果に関して、十分に検証されていない。本研究では、同一の日本語文を扱った整

序問題と英訳問題に対して、学習者がどのように対応するかを分析し、整序の学習効果と整序を用いたライティング指導のあり方を検討する。

本研究では、20の日本語文から整序と英訳の2種類の問題を作成する。中級学習者の高校生40名を2つのグループに分け、一方のグループに整序として出題した日本語文をもう一方のグループには英訳として出題する。整序と英訳の得点の相関を求め、また、各日本語文での参加者の整序・英訳の解答についても質的な検討を行う。

その結果、整序と英訳の得点の相関係数が低いことが導かれる。また、実際に参加者の英訳の解答を分析したところ、複雑な文構造を回避する傾向が見られ、英訳の方が取り組みやすい問題もあると導ける。一方、英訳の際、日本語文中に現れない代名詞や冠詞に関するエラーが多いという傾向も見られる。よって、中級学習者に対しては、整序の指導に終始せず、より解答の自由度の高い、実践的なライティングの指導の割合は今以上に高めるべきであると結論づける。

【第2室 304教室】

1. 事例報告：英語習熟度最下位クラスにおけるスピーキングによる学習 振り返り—理解が深まる授業を目指して—

牧野 眞貴（近畿大学）

本実践は、英語リメディアル授業において、スピーキングで学習を振り返り、授業内容の理解を深めることを目的とした。本実践には私立大学英語非専攻1年生2クラス39名が参加した。学生は英語習熟度別クラス編成において最下位クラスに在籍している。英語授業は発表者が週に2回半期30回を担当し、スピーキング&リスニング、TOEIC対策、語彙の3冊の教科書を使用した。授業では、スピーキング教材の会話文だけではなく、リスニング、文法および語彙学習においてもスピーキングを取り入れ、その日の学習を振り返らせた。例えばリスニングでは、聞き終わった会話文を使用して、CDと同じように英語を話す練習を行う、文法や語彙学習では、答え合わせをした練習問題の中から自分が間違った英文を暗記し、グループの仲間の前で発表するというものである。本実践により学生の英語力が向上したかを確認するため、事前・事後テストとしてTOEIC Bridge問題集付属の模擬試験（100問）を4月と7月に実施し、統計解析ソフトウェアSPSSで比較分析した。その結果、学生の英語力が有意に向上したことが確認された。発表では指導の手順や学生の様子を詳細に報告する。

2. 研究発表：-ing 形節：「分詞構文」に代わる新しい文法用語

秦 正哲（兵庫医療大学）

本研究の目的は、英語文法用語「分詞構文」に代えて新しい用語である「-ing 形節」を使用することが望ましい、という提案の趣旨について述べることである。現在一般的に使用されている英語文法用語「分詞構文」には、論理的整合性が欠如している。文法項目「分詞構文」の習得が、多くの英語学習者にとってこれまで困難なものとなってきた原因の1つが、この点にあると考えられる。動詞の-ing 形を単に-ing 形と呼ぶことにすると、実は、「分詞構文」と呼ばれる言語現象において、-ing 形は形容詞の意味を有する「分詞」として機能しているのではなく、動詞として機能している。本研究においては、「分詞構文」と呼ばれる言語現象における-ing 形の用法を、論理的整合性を具備させながら説明する。その上で、英語文法用語「分詞構文」に代わる新文法用語「-ing 形節」を使用することを提案する。英語文法用語「分詞構文」が指示対象とする言語現象を習得する過程において多くの英語学習者が直面してきた困難を軽減することに、本研究が役立つことが期待できる。

3. 事例報告：The case study of communicative language teaching: Completing the task by communicating with each other

小越 裕史（神戸市外国語大学 大学院生）

1. General aims

I let the students write their autobiography and present it in front of everybody by using grammatical tense which they have already studied for the mid-term and final exams. In addition, I made them to express their own idea by using English.

2. Learning objectives

1) Students completed their autobiography by using grammars which they have already learned. (Task-based language Teaching)

2) Students presented their autobiography in front of the class. During the presentation, the listeners wrote a comment about the speaker's autobiography. (Communicative Approach)

3. Teaching objectives

1) Teacher told them to write their autobiography by using grammars which they've already studied for the final exam.

2) Teacher made students express their idea in English.

4. Results and Reflection

According to their comments, most of them said that it was fun to do group work and nearly all of them enjoyed making sentences in English and presented it. However, there were two problems which I faced through this lesson and need to improve. First, when they make groups the boys and the girls were separated and never mixed up. This is because they are shy on working together. So next time I let them do group work, I will be more careful about their relationships. Second, it was on the comment, which says it was difficult for them to think about their future dreams.

【第3室 305教室】

1. 事例報告：学習者の意欲を引き出す導入授業—認知スタイルの観点をふまえた—考察—

井上 聡（環太平洋大学）

CLTの重要性が叫ばれる中、訳読式の授業も依然として根強く残っているが、それぞれの教授法に一長一短があることを考えると、必ずしも二項対立式に議論されるべきものではなく、むしろ融合されるべきものである。本研究において、異なるタイプの教育介入を行ったところ、教師と学生の双方向性が保たれている場合、CLTと訳読式授業への満足度に差は見られなかった。主成分分析を通して、CLTが場依存・聴覚型の学習者に好まれる一方で、一方向・訳読式の授業は場独立型の学習者に好まれるという対極的な性質が認められたものの、双方向・訳読式の指導は中間的な場所に位置づけられていた。協力者のコメントからは、CLTの長所として「コミュニケーションを通しての定着」が、訳読式のメリットとして「自分で考える習慣の定着」が示唆されたが、その反面、双方ともに教師中心に偏ると学習が困難になるとの指摘も見られた。時期、単元、学習者要因に応じて、指導方法を柔軟に選択すること、および、どの教授法を選択するにしても、双方向性を担保することが不可欠である。

2. 研究発表：英語発話時と日本語発話時の眼球運動の比較についての一考察—スピーキング指導法開発を目指して—

片野田 浩子（四天王寺大学）・クリス西浜（CKD(株)）

これまでのスピーキング指導において、日本語を話す時と英語を話す時の目の動きの違いに気付いたことに基づき、“日本語を話す時には目が上下に動き、英語を話す時には目が左右に動く”という仮説を立てた。被験者の協力を得て、眼球運動の軌跡がスクリーンに示される装置を使い実験を行った。被験者には、日本語と英語を話してもらい、それぞれの場合の目の動きを比較した。その結果、仮説“日本語を話す時には目は上下に動き、英語を話す時には目が左右に動

く”は、モノリンガルとバイリンガルの被験者の実験結果から検証された。さらには、セミバイリンガルの被験者対象の実験結果からは、「日本語を話す時も、英語を話す時も目が左右に動く」という興味深い結果が得られた。現段階では、まだ被験者の数が少ないため、今後は同様の実験を続け、検証を繰り返し教育現場で利用できるスピーキング指導法の開発につなげていきたい。注：本研究は科学研究費助成事業の採択を受け行っているものである。研究課題名「脳科学データに基づく英語スピーキング教授法の開発」研究課題番号 15K02708 補助事業期間 2015 年～2017 年 基盤研究(C)

3. 研究発表：4 技能統合を目指す「アクティブ・ディクトグロス」の提案

西村 嘉浩 ()

現行の中学校、高等学校の学習指導要領では、4 技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力の育成が、一貫した学習目標として明確に掲げられている。

この学習目標を目指すため、ディクテーションを発展させた従来のディクトグロスを基に、学習者の能動的な参加を促し、4 技能の統合の促進につながる新たな視点を加えた言語活動を構築することを研究の目的とした。これを「アクティブ・ディクトグロス」と名付け、本発表にて提案をするものである。

「アクティブ・ディクトグロス」では、これまでの第二言語習得の研究や文献による知見を活かしつつ、インプット、アウトプット、インターアクションの3つの要素を有機的に関連付け、教員と学習者、学習者どうしのコミュニケーションを重視している。さらなる4技能の統合を目指すため、新たな考察や創造性取り入れた言語活動の構築を図った。

また、「アクティブ・ディクトグロス」には、アクティブ・ラーニングで重視される「深い学び」、「対話的な学び」、「主体的な学び」の3つの視点が一連の言語活動に含まれる。まさに今後の英語教育に応用可能な言語活動となり得ることが示唆された。

【ポスター・デモ発表 第1室 310 教室】

1. L2 使用とクラスルームの活性化—2つの中学校の授業観察から—

中野 里香 (関西大学大学院)

授業における L1、L2 使用については様々な見解があり、ESL 環境において L1 の重要性が再認識される一方で、日本の EFL 環境においては、L2 使用が促進されている。文部科学省の方針では、高等学校だけでなく、中学校においても、2020 年までに原則英語で授業を行うことが提言されている。しかし、2013

年に行われた調査においては、中学校のそれぞれの学年において、「発話をおおむね英語で行っている」または「発話の半分以上を英語で行っている」教師は約 55%にとどまっている。そこで、本研究では、関西にある 2 つの中学校を実際に訪問し、授業の中で L2 がどのような場面で使用されているか、また、それぞれの教室の学習者がどのような態度で学習しているか観察した。観察の結果、教師の L2 が音読やクラスルーム・イングリッシュ、既習文法を用いたスモールトークなどで比較的多く使用されている学校では、学習者の積極的な授業参加があり、授業の活性化が見受けられた。他方で、教師の L2 使用が音読程度にとどまる学校では、学習者の消極的な反応が目立った。この観察により、教師の L2 使用と授業の活性化の可能性が示唆された。

2. Unfocused Task での学習者の気づき

濱地 亮太（関西大学大学院）

日本の学校英語授業では、学習者に言語使用を促す手段に様々なタスク活動が提唱されている（e.g. 高島, 2000; 松村, 2012）。PPP 型の授業展開を支持する立場の研究者は、タスクを学習した文法項目の定着のための練習活動に続く最後の「P」の段階に位置づけ活用すべきであると主張している（e.g. 佐藤, 2011）。実際、活動中に特定の言語形式や文法項目を学習者が注意を払って使うことを想定した「ターゲットありのタスク（focused task）」が、現在、数多く提唱され使用されている。一方、タスクには学習者による特定の言語形式や文法項目の使用を想定しない「ターゲットなしのタスク（unfocused task）」もあるが、これの英語における効能に関する研究は十分になされてきているとは思えない。そこで今回は発表者自作のタスク（unfocused task）活動中の学習者の気づきについて調査した。具体的には、26 名の大学生を対象にタスク活動実践後の質問紙による意識調査と刺激想起法を用いた面談を行った。事前の英語学習経験に関する質問紙調査と合わせて分析した結果、学習者の学習経験がタスクへの参加態度に影響し、同じタスク（unfocused task）でも、得られる気づきに差があること明らかになった。

3. 日本留学中の日本語学習者の英語学習ニーズに関する考察

辻本 桜子（立命館大学）

現在、日本語教育機関の中には、国内の大学、大学院等、高等教育機関への進学を希望する留学生を対象に、英語教育も実施している機関が多数ある。しかし、これまでのところ、日本語を学びつつ、英語学習を並行して行う学習者に対する英語教授法の研究や教材の開発はなされていない。本研究は、留学生

の英語指導や教材開発に向けた基礎研究として、英語学習のニーズを明らかにすることを目的としたものである。調査の方法は、日本語教育機関で学ぶアジア人留学生（中国人・韓国人等）に対して、英語学習に対する動機、得意、苦手項目、授業で指導を受けたい項目、自習を希望する項目の5点についてアンケート調査を行った。調査の結果、学習者は日本の大学入試や進学後を意識した英語学習の動機を持つものの、英語力には自信がない者が多く、特に語彙や文法に苦手意識があることが分かった。しかし、苦手項目のうち、語彙については自習を希望する者が多く、教室では文法の指導を望む者が最も多いことが分かった。これらの結果から、今後の留学生に対する英語指導と教材開発時の示唆を得ることができた。